

第459空輸中隊と第374医療即応中隊、24時間体制の航空医療を実践 *Airlift Capable 24/7: 459 AS, 374 HCOS demonstrate aeromedical readiness on Independence Day*

July 22, 2024

By Senior Airman Jacob Wood
374th Airlift Wing Public Affairs

緊急事態は予期しない時に発生する。広範な任務と何千人ものコミュニティメンバーを抱えるチーム・ヨコタは、そのような一刻を争う時に迅速かつ適切な医療を提供できる特別な能力を持っている。この医療を担うチームは、たとえ独立記念日のような休みの日でも常に即応できる態勢にある。

7月4日、第459空輸中隊と第374医療運用中隊の空兵がその能力を発揮し、一人の軍人を横田基地から横須賀海軍基地へ航空医療搬送した。

第374医療運用中隊救急サービス小隊の隊長兼同小隊救急外傷看護官オマール・バーガス大尉(写真:1)は、その患者に救命救急を行ったメンバーの一人だった。

バーガス大尉は「看護官は搬送中、患者の容体の確認、処置、状態の安定化、患者への声掛けなどを行う。横田に配属された唯一の現役の救急外傷看護官としての経験から、迅速で適切な処置が患者が回復するために欠かせないことを確信している」と語り、「今回のケースも例外ではなかった。いち早く治療を必要とするその患者のため、全チームが団結して対応した」と強調した。

通常、横須賀海軍基地は横田基地から救急車で2時間以上もかかる距離だが、空路ではわずか25分で到着でき、患者に短時間で必要な医療を提供することが可能だ。

医療と空輸チームの連携による今回の航空医療搬送は、これまでの最速記録となった。

第459空輸中隊フライトエンジニアのケイリ・ロドリゲス上級空兵(写真:2)は「出勤要請を受けてから30分以内に第459空輸中隊に集合し、それから1時間以内に飛び立つ準備ができなくてはならない。今回は、40分以内に駐機場から患者を搬送できる準備が整った」と述べた。

第459空輸中隊は2023年12月に24時間対応の即応体制を導入し、以来3回の航空医療搬送を行った。

第459空輸中隊司令部副官で今回の航空医療搬送の副操縦士を務めたジェイコブ・テイラー大尉(写真:3)は「最初の医療搬送は体制の導入から2週間も経たないうちに行われ、2回目はおおよそ1ヵ月後だった。幸いなことにその後の要請はなかったが、この新体制を築いてから、我々は24時間いつでも即応できるよう待機している」と述べた。

第459空輸中隊と第374医療運用中隊は、軍人とその家族が必要とする適切な医療を提供できるよう取り組み、昼夜を問わず協力し、最も大事な資産である人々を支えている。

